

中上健次『火まつり』
——映画から小説へ——

守 安 敏 久

宇都宮大学教育学部紀要
第61号 第1部 別刷
平成23年（2011）3月

Nakagami Kenji's *Fire Festival* : from a Film to a Novel

MORIYASU Toshihisa

中上健次『火まつり』

——映画から小説へ——

守安 敏久

和歌山県新宮市の西方にそびえる権現山は、神が降臨する神体山として崇められ、山の南、高さ百メートル近い断崖絶壁には熊野三山の一つ熊野速玉大社の摂社である神倉神社があり、山から市中を睥睨している。神倉神社は、『日本書紀』の天磐盾あまのいわたてと伝えられる巨大なゴトビキ岩をこ神体として、蟄蛙の形にも似たその靈石に寄り添うように建立されている。神倉神社の「お燈まつり」は熊野に春を呼ぶ男の火まつりとして毎年二月六日夜に斎行される。約二千六百年前、神武天皇東征の際に祭神・高倉下命たかくらしののみことが松明を持って案内したことに由来するとの故事もあるが、「お燈まつり」の起源は『熊野年代記』に敏達天皇三年（西暦五七四年）と記されている。

山車も神輿も登場せず、歌舞音曲とてないこの火まつりを控えて、二月六日の新宮市は日中はいたって平穏である。ところが夕刻ともなると、白装束・白足袋に草鞋をはき、腰には荒縄を巻きつけ、祈願の松明を手にした男たちが町のあちこちから立ち現れる。男たちは一週間も前から女性を絶って潔斎し、当日も白米・豆腐・かまぼこ・白身魚など白いものばかりの食事を取る。市内の阿須賀神社・熊野速玉大社・妙心寺と巡拝した後、神倉神社へ向うが、行き交う男たちは手にした点火前の松明を「頼むで」「頼むで」と打ち交わす。それは警戒と信頼を表わす儀式的な身振りだ。巡拝の途上では町のあちこちで、女たちから酒が振舞わ

れる。当夜は神倉神社麓の太鼓橋を結界として女人禁制となり、男たちだけが、源頼朝寄進と伝えられる五百三十八段の険しい石段を上っていく。氏子か否かは不問で、白装束・荒縄をまとい松明を手にした「正装」の男であれば、誰でも「上り子」となれる。この「上り子」となった者だけが、山頂境内で神火を受けることが出来、ただの「観光客」は男であろうが、麓の結果外に止められ、山頂の神事を窺うことはできない。

当夜は山頂ゴトビキ岩近くの狭い境内に約二千人の男たちが集い、玉垣門が閉じられた後、神火の到来を待つ。神火が到来し、おのおのが持参した五角錐の松明に火を受けると、夜闇の境内に無数の松明の火々が燃え盛り、荒ぶる魂が高揚する。火は破壊力と生命力を同時に揮いながら、燃え立つ煙で人々の邪気を燻りだす。やがて玉垣門が開かれると、先陣を争う殺気立った若衆が五百三十八段の石段を一気に駆け下り、新宮節に「お燈まつりは男のまつり、山は火の滝くだり龍」と唄われる通り、連なる松明の火々が流れるように山を下っていく。麓の結果外では、宝塚歌劇ファンのスター「出待ち」よろしく、列をなした女たちが駆け下りる勇壮な男たちを出迎えてくれるだろう。

「お燈まつり」は、「火の威力を崇拜し畏怖し感謝するという古代人の信仰と、靈石ゴトビキ岩を神の依代としての神迎えー神おろし行事として発生したものである（上野元）¹」。火を通して内なる粗暴さと向き合い、

それを生命力としながら、神霊の存在を身に受ける、自然崇拜と祖霊信仰に支えられた独特の火まつりだ。

新宮市の「路地」に生まれた作家・中上健次は、少年時はもとより、上京後もたびたび帰郷しては「上り子」となってこの神火を受け継いでいる。中上は『火まつり』の題名を冠して映画シナリオをまず書き、さらに後にそれを自ら小説化している。いずれも「お燈まつり」の場面は終盤わずかにあるだけだが、人間の内なる粗暴さと自然の霊力を描くことは、作品全体を太く貫いている。

I 映画『火まつり』

中上健次の小説を原作とした映画は『青春の殺人者』（監督＝長谷川和彦、脚本＝田村孟、原作＝『蛇淫』、ATGほか、昭51）以来、数本製作されている。同名の小説を原作とした映画『十九歳の地図』（監督＝脚本＝柳町光男、プロダクション群狼、昭54）について、原作者の中上はかなり不満があったようだが、さらに後に監督の柳町光男が新作映画の構想を提案し、中上自らがオリジナル・シナリオを手がけることで、映画『火まつり』は始動する²³。映画は西武セゾングループ第一回製作作品として、昭和六十年五月二十五日、日比谷映画、シネ・ヴィヴァン・六本木ほかで公開され、同年のカンヌ国際映画祭にも正式出品された。

監督＝柳町光男、製作＝清水一夫、脚本＝中上健次、音楽＝武満徹、撮影＝田村正毅、美術＝木村威夫、照明＝高屋斉、編集＝山地早智子、出演＝北大路欣也（達男）、太地喜和子（基視子）、中本良太（良太）、三木のり平（山川の兄さん）、宮下順子（達男の妻）、安岡リキヤ（トシオ）、伊武雅刀（移動パン屋）、小鹿番（鍛冶屋）、森下愛子（保母）他、西武セゾングループ、シネセゾン、プロダクション群狼提携作品、35ミ

リイーストマンカラー、上映時間126分。昭和六十年度キネマ旬報ベストテン第三位、主演男優賞受賞（北大路欣也）。第四十回毎日映画コンクール（昭和六十年）脚本賞受賞（中上健次）、男優主演賞受賞（北大路欣也）。映画は後にVHSビデオ（ポニー、昭61、分類番号VI78F1217）、DVD（ハピネット、平13、分類番号BBBJ1836）として刊行されている。

中上健次『火の文学』（角川書店、昭60）には、昭和六十年二月六日「お燈まつり」参加のドキュメントとインタビューを加え、オリジナル・シナリオ『火まつり』が収録されている。また同書はそのまま『火の文学』（角川文庫、平4）として文庫化されている。

舞台である熊野の二木島（三重県）は一方で熊野灘を臨む漁業の町であり、一方で熊野の原生林を後背とする山林業の町でもある。昭和三十四年紀勢本線開通の際は町民も沸いたが、いまや町はさびれており、海中公園建設の噂だけが空ろに飛び交っている。町の旧家の当主で妻である四十歳の達男は、木こりとして数人の仲間と山林伐採に従事している。たくましい肉体と「ムシヤクシヤする」気持ちを持って余す達男は猟銃で猿狩りをしたり、弟分の漁師と禁区の聖域で泳いだり、傍若無人に振る舞い、「山の神サン、俺の彼女じゃ」とも囁く。若者・良太はその達男を「アニ」と慕い、つき従っている。

ある日、海から小船で達男の幼馴染みの基視子が久々に帰ってくる。十二の頃から「初めての男」として達男に惚れきっている基視子は、夜の船上で達男と情事を重ねる。とはいえしたたかな基視子は土地ブローカーの山本の兄さん（完成映画では「山川の兄さん」）から色仕掛けで大金をまきあげ、若い良太とも関係に至る。

何者かが港のハマチの養殖場に三度までも重油をまき、村の誰もが「ワ

ル」の達男の作業と疑うが、同時に「アニ」に対抗する良太の作業とも暗示される。

山仕事の最中の天候の変化に敏感な木こりたちは下山するが、突然の大雨にも達男は「そのうち止むぞ」と山の靈氣と感応するかのごとく動かない。新宮市での「お燈まつり」では、達男は「上り子」たちに喧嘩を仕掛けて荒れ回る。

海中公園予定地の自家の所有地処分をめぐる親族一同が招集された日、達男の家では猟銃の銃声が何度も轟く。わが子二人を含み、親族・家族一同が達男の銃弾に倒れ、最後に達男も自殺する。

シナリオ梗概を素描するとこのようになるが、中上はこのシナリオで、「噂の辻」と名づけて、町の広場にたむろする老婆や漁婦たちの噂話を通して物語を手繰ろうとしているかに見える。港に面した町の広場は、漁師たちの水揚げの場であり、また山林伐採に向う木こりたちを乗せるトラックの出発場所でもある。熊野の地勢と生活を象徴するかのようには、広場に海の民と山の民が行き交う。また流しの鍛冶屋がそこで一時の店開きをしたり、移動パン屋の車がやってきたりする。外の世界と内の世界の情報が行き交い、たむろする老婆や漁婦の噂話が、真偽を超えて流通していく。派手な基視子と達男の情事や、いつもは騙す側の土地ブローカーがころりと基視子に騙されていく顛末など、「噂の辻」のクロス連こそが町の出来事を把握しているのだ。

また中上は『火の文学』（前掲）「ノート」で、山道のあちこちに鳥を獲るワナを仕掛けている良太の視点に立って、シナリオ全体をこう解説している。

ワナはサルに向けられ、さらに人に向けられる。人に向かって仕掛

けたワナは、山本の兄さん、さらに基視子へと移り、達男に向けられる。

ワナ、聖供を獲る場所。良太は、聖供として達男を追い込む。重油を三度、魚の養殖生實いけすにまく。聖供として達男はきわだつ。しかし達夫は、愛する者らを追つれに一家惨殺し、死ぬ。良太は、達男を狩れなかったことを知る。おそらく良太は、新たな達男として生きる。パシッとワナが落ちる音がする。

（『火の文学』「ノート」）

猿狩りをし、禁制を破り、女たちと次々関係し、「山の神サン、俺の彼女じゃ」と囁く達男は、良太にとって「ワル」の英雄である。良太の英雄憧憬とその反動としての対抗憎悪が、「聖供として達男を追い込む」ことへと向かっていく。まず良太は達男の行動を模倣・反復しようとする。達男が弟分のトシオに向かって、「ポケットに手を入れ、股間が勃起したようにつくり、くつくつ身をよじって笑う」独特の卑猥な合図を繰り返すと、やがて良太も真似をする。「立ったまましたことあるか」と達男がある女に誘いかけると、良太もまたガールフレンドにそう言い寄る。そして良太は達男同様に、基視子と関係する。

シナリオだけからは、重油まきの犯人を特定できないが、中上の念頭には良太があったようだ。とはいえ、達男は一家惨殺と自殺によって、良太のワナをするりと抜けて、より大いなる悪の闇に踏み出していく。そこには「王殺し」の葛藤と対決が決定的に欠けている。『岬』『枯木灘』『地の果て至上の時』三部作で、秋幸と「蠅の王」たる実父・浜村龍造とが向き合った「王殺し」の壮烈な葛藤はない。浜村龍造も最後は自殺だが、そこには憎みあい愛しあう出自と血縁の「修羅」が展開していた。

また一家惨殺に至る達男の家族との葛藤もしかとは書き込まれていな

い。母親は当主としての達男の権限を尊重しており、不和らしきものも顕在化しない。ただ「若いといえば若い、すでに人生のカーブを切っ
てしまっている男である。だが、女房や子ども、母親、という関係の中
には収まり切らない（たぎり）のようなものがある」という記述などに
示唆があるのかもしれない。その葛藤を中上はあえてシナリオには書き
込まず、監督による映像解釈に委ねたのかもしれない。ラストの惨劇の
不可解な唐突さは、逆に言えば、発作的な暴発の衝撃を与える一面もあ
る。

「ワル」の英雄とも「聖供」ともなる達男だが、それは単に共同体の
規範に違反するからだけではない。「山の神サン、俺の彼女じゃ」と嘯
く達男は、木こりとして山の気象を読み、両手で聖なる大木を抱き、山
霊と対話することが出来るかのごとくだが、あるいはそれは卑小な錯誤
かもしれない。山に踏み入り、木を伐る人間の存在そのものが「悪」だ、
という畏怖が中上にはあったからだ。中上が紀州を旅して、その自然と
生活を「差別」の相のもとに考察した渾身のルポルタージュ『紀州 木
の国・根の国物語』（朝日新聞社、昭53）の「新宮」篇にこうある。

材木商いの魅力とは、つまり悪の魅力であろう。悪とは、材木商ら
が山林地主をダメして山を安く買ったたくでもなく、人夫らをア
ゴ先で安い労賃で使う事でもない。杉本氏の話を書いて、悪とは、樹
木、材木を伐り倒し、売り買ひするその行為なのだ、と思った。水と
いう自然、光という自然によって、樹木は成育する。樹木が、材木と
いう商品になる為にはどれほどの年月と、自然の力と、人間の労力が
かかっているか分からない。いや、単に商品として材木を見るのでは
なく、杉本氏が言うのは蓄積された自然としてある樹木、材木である。

山に入って風に吹かれていると、心の中がひりひりする、一服して
いるとぞんげしている気になる、そう元材木商の氏が言う言葉に、自
然に向きあつて自然を加工しようとする悪の痛みを感じる。材木は面
白い。
（『紀州 木の国・根の国物語』）

「自然に向きあつて自然を加工しようとする悪の痛み」を感じ、大自
然の前に「ワル」の英雄の卑小さを知つたればこそ、達男は我とわが一
族を「生贄」としたのかもしれない。

ところで、神武天皇東征の折、熊野から八咫鳥やたがらすに導かれて大和を征服
したという、その神話における熊野上陸地については諸説あるが、二木
島もその地のひとつである。また二木島には秦朝から不老不死の霊薬を
求めて渡海した徐福の渡来地との伝説もある。中上も当然このことを意
識しており、シナリオ『火まつり』で基視子が海から小船でやってくる
のも、この渡来伝説を踏まえている。

基視子の造型については、中上が愛読した上田秋成『雨月物語』「蛇
性の姪」の真女子まなごにその祖型があるだろう。紀の国三輪が崎の優男・豊
雄にとりつき、生涯の契りを激しく迫る蛇の化身である。自ら男に求婚
し、かき口説き、執念くとりすがり、やがて男を破滅へと追いやるうと
する女。シナリオ『火まつり』の基視子は、十二の頃から「初めての男」
として達男に惚れきつており、いままた再び情事を重ねる。達男はこの
性関係に超然としており、一家惨殺に至る原因は必ずしも基視子にはな
いが、達男の破滅への道程に彼女の影が射していることは疑えまい。

ここで中上によるシナリオと、柳町光男監督による完成映画を照らし
合わせてみると、場面の順序移動や削除などはある程度あるものの、そ
の基本的な骨格は同じものと言っていいたいだろう。異同を例示すれば、骨

折した山本の兄さんを車で搬送する途中、狭い道でバスと対向した達男が、バスの運転手に食ってかかる場面がシナリオにはあるが、映画では削除されている。また良太と基視子との川での水浴場面、求めてくる良太に対して、いったんは頬を張って基視子が拒むものの、ついには関係に至る展開でシナリオ化されているが、映画での水浴場面は、ふたりの危うげな関係を暗示するに止め、老婆らの「噂の辻」がその情事をふりまく形となる。

ちなみに、早稲田大学演劇博物館には、関係者用の映画『火まつり』撮影台本が三種類所蔵されている。「第一稿」、「第二稿」（淡青表紙版）、「第二稿」（白表紙版）で、このうち「第二稿」（白表紙版）には達男による一家惨殺のラストシーンがない（それ以外は淡青表紙版と同じ）。「第一稿」では「企画Ⅱ奥山和由」となっているが、「第二稿」では消え、「プロデューサーⅡ清水一夫」となっている。「第一稿」、「第二稿」（淡青表紙版）は、ほんのわずかに異なるが、ほぼ同じ撮影台本で、完成映画に対応している（いくつか場面移動あり）。「火の文学」所収の中上のオリジナル・シナリオは、「第一稿」以前のものである。

また新宮市立図書館にある中上健次資料収集室には、稿番のない『火まつり』撮影台本と、早稲田大学演劇博物館所蔵「第二稿」（淡青表紙版）と同じものの二種が所蔵されている。この稿番のない『火まつり』撮影台本には新たに俳優・スタッフ名が印字されており、「第二稿」以降のものである。

『火の文学』（前掲）「ノート」で、「テキストとしてのシナリオ『火まつり』の読解の一つが、フィルム版『火まつり』なのだ」と述べる中上は、「映画製作という分業労働から一つはみ出し」て、フィルム版と距離を置くようにしている。シナリオ読解を踏まえた、フィルム版の困難な

作業のひとつは、山の民が向き合う山の大気の変化や肌ざわり、さらには自然の霊力を、映像としてフィルムに刻み込むことだろう。ここでは同じようにその困難な作業に挑み、山の大气と樹木の霊力を引き出した映画『殞の森』（監督・脚本Ⅱ河瀬直美、平19）と比較しながら、映画『火まつり』を考察してみたい。

第六十回カンヌ国際映画祭グランプリ受賞の映画『殞の森』は、奈良県東部の山間地を舞台に、三十年前に亡くした妻の思い出とともに生きる軽度の認知症患者・しげきが、その妻の眠る森への墓参りで、付き添った若い介護士・真千子とともに、山中に踏み迷う道行を描き出す。山に解き放たれたしげきは「野生児」さながら、道なき山中をどんどん進んでいく。激しく雨が降り、出水があり、迷える介護士は怖れ、「行かん」といてと泣き叫ぶ。一夜を山中で明かすことになった二人は、焚火を静かに見つめながら、互いの濡れた身体を暖めあう。翌朝、しげきはようやく森の中の妻の眠る地に至り、幻想のなかで記憶のなかの若き妻とダンスする。さらに両腕を広げて聳え立つ大樹を抱き、樹霊と身体ごと対話し、引き続き胎児のごとき姿勢で大地に伏す。自らもわが子を失い、生きることに後ろ向きになっていた真千子は、しげきの「鎮魂」の身振りをわがこととして「ありがとう」とつぶやく。

映画『火まつり』と同じく、不安定な天候の森に激しい雨が降り、聳え立つ大樹を両腕で抱く場面があり、そして火が魂の根源を揺さぶる。『殞の森』で二人が囲む焚火は、夢想と休息への誘いであり、一方『火まつり』で燃え盛る「お燈まつり」の松明は、達男の破壊衝動を象徴している。ガストン・バシュラール『火の精神分析』（一九三八、邦訳せりか書房・前田耕作訳・改訂版平2）が指摘するように、火は相異なる二つの価値づけを受け入れる、「守護と威嚇、正と邪の神である」。

『殞の森』では、介護する者とされる者との社会学が、大自然のなかで無化し、また夢想のなかで死者が甦り、老いたる者が誕生の始原へと一気に遡るようなドラマが、地水火風の霊気を通して描き出されている。認知症の老いたる魂が、絶望を抱えていた若い魂を救い出す道行が、ひんやりした山の大気のなかで展開するのだ。

『火まつり』において、確かに聳える大樹や驟雨や燃え立つ火は描かれてはいるが、良太だの家族だのとの人間的な葛藤を欠き、達男自身の内省化が曖昧なまま推移するので、包み込む自然の肌ざわりには多少し強度が感じられない。自然のドラマは人間のドラマと緊密に重なっており、それは中上のシナリオ自体の強度にも係わるのかもしれない。

ここで同じく山の民の映画として、スイス映画『山の焚火』（監督・脚本＝フレディ・M・ムーラー、一九八五）を引き合いに出してもいい。山といっても、林間地ではなく、こちらはアルプスの牧草地を舞台とする。孤立した山中で牧畜と農業を営む父母、姉娘と聾啞の弟の四人家族が暮らしている。思春期の弟は反抗期を迎え、父と対立して、さらに山の上の一軒屋に閉じこもる。姉が様子を見に行き、山上で焚火を囲み、いつしか抱き合う。やがて姉は妊娠し、それを知って逆上した父はライフル銃を手にして姉娘のほうに向かうが、弟と格闘になり、銃弾は父を貫く。惨劇のなか、母もショックで死ぬ。ここには近親相姦があり、不慮の事故ながら「親殺し」が描き出される。『火まつり』同様、銃による家族の死が大団円となっており、また山の大气と瞑想的な焚火が独特の始原の感触を映画に与えている。『山の焚火』のギリシア悲劇めいた神話性こそ、むしろ中上文学の世界に近いとも言えるが、映画『火まつり』にはこの神話性が欠けており、始原の感触も弱い。

Ⅱ 熊野市一家七人殺し事件

三重県熊野市新鹿町に購入した土地の登記問題が生じ、前年からのアメリカ生活を打ち切った中上健次は、昭和五十五年一月、熊野市新鹿町の借家に仮転居、有機農法で畑などを作って約半年間居住する^⑤。ちょうどそのとき、同年一月三十一日午後六時、熊野市二木島町では農業・池田一通^④による一家七人殺し事件が起こり、翌日の全国紙はこぞって一面で報道している。ここでは地元三重県で配達された『朝日新聞』名古屋本社版（昭55・2・1朝刊）一面記事「家族ら7人次々射殺／3人けが、本人自殺／三重県熊野」から抜粋しよう。

じん臓病で長期入院している愛児の病状に悩み続けた父親が突然、興奮状態になり、かけつけた医師の診察も拒んだあげく、心配した家族が近くの親類を集めたところ、暴れ出し、手オノをふるい猟銃を乱射して、母親と保育園児の二人の愛児ら七人を次々と惨殺する事件が熊野市で起こった。父親は惨劇の直後、かけつけた警察官を前に自らも猟銃で自殺した。三重県警捜査一課と熊野署は、事件のくわしい経過や動機を調べているが、ふだんはおとなしい父親がわが子かわいさの果ての凶行——思いもよらぬ「狂気」に、静かな漁村はふるえあがった。（中略）

同署で調べたところ、池田に殺されたのは家族や親類の人たち七人。池田の母親とくへさん^⑥が離れの玄関先で、姉の岡本さなまさん^⑤が玄関先の軽トラックの荷台、池田の弟の池田寿一さん^③がもう一台のライトバンの運転席、妹の森本実子さん^④と池田の次男忠ちゃん^⑤と三男の正和ちゃん^④＝いずれも二木島保育園児＝

がライトバンの後部座席でそれぞれ血まみれになって死んでいた。

(中略)

これまでの調べでは、池田の長男が昨年五月、通学先の中学校の集団検診でじん臓病とわかった。このため和歌山県新宮市内の病院入院後、七月になって津市内の国立療養所三重病院へ移った。こうしたことから子どもの入院に悩み続けた結果、突然狂い、犯行に及んだのではないかと捜査当局はみている。

池田は、田んぼとミカン畑約七千平方メートルのほか、かなりの山を持つ土地持ちだった。しかし、生活はそれほど裕福だったわけではなく、他の人たちと同じように農閑期には石工やダンプの運転手をしていった。

無口で、人付き合いのいい方ではなかったが、おとなしい、いい男というのが近所の人の評。(後略) (『朝日新聞』)

地元で起こったこの一家七人殺しに、中上もまた興味を持って報道を追いかけている。「私小説と物語が交互に書かれた」短編連作集である『熊野集』(講談社、昭59)「桜川」の章に、中上は次のように書いている。

ちようどたまたま新しく居を定めたところが、男が猟銃で一家七人殺傷し自殺した事件のあった熊野市二木島から二つ手前の村新鹿だった事もあり、今年は一ひとおりでなく桜が眼についた。熊野市から大泊を通って尾鷲への道ではなく海沿いに狭い道に入り、徐福上陸の碑があるあたりに、ほどよい大きさの桜が並び、さらに新鹿の入り口から道におおいかぶさるように桜が続く。もちろん数だけを言うなら新

しく借りた川そばの借家までの桜など取り立てて言うほどの数ではない。ただ事件の報道を追って新聞を読み週刊誌を読む者から見れば、新鹿と同じように海と山の間のわずかばかりの土地の二木島で起った事件の渦中にいた二人の子供らの声が、桜の重なるの向こうから聴こえてきもする。実際、眼に見えるように想像できるのだった。体の具合が悪いからと一統の者に集まってもらった男には一統を強引に心中に引きずり込む気持ちはあつたろうが、二人の子まで道づれにしようとは思わない。だが子供は男の心を知らず、大人らが家に集まっている事に眼をうばわれている。それで男は「ジュースでも買ってこい」と言いつけてその場を離れさせようとするが、狭い村で、駄菓子屋はきまって眼と鼻の先にあるものだった。ジュースを飲みながらすぐに戻ってもきたのだろう。二人の子供が射ち殺された一統の中に入っていたのは言うまでもない。

東京で永い間住んでアメリカへ渡り半年ほど一家で暮らして、二木島から十分ほどの新鹿に借家すまいしたのは、アメリカへ渡る前に版元から前借りして土地を買っていたからだ、その事件の勃発は小説を書いて暮らしている者の業の深さを眼のあたりにするようだった。身をのり出して事件の報道を追う業のうごめきと、あきらめに声もなかった。その事件は自分がいまままで書いて来た小説の顕現化だとも思ったし、私小説で何度も書いた主人公の暴発が成就したものだともいう思いもつもった。ノートを取り、ひりつく気持のうちに小説に仕立てようと何度も試みた。実際何もかも符丁が合い過ぎていた。

(『熊野集』「桜川」)

事件直後の週刊誌記事を列挙すると以下のようになる。

- ① 『週刊文春』(昭55・2・14)「三重県熊野市一族七人を惨殺して自殺した男の『正気の瞬間』」
- ② 『週刊朝日』(昭55・2・15)「三重県熊野市一族惨殺！ その直前、父親は子供を逃がそうとした…」(中野晴文、森田秀男)
- ③ 『週刊読売』(昭55・2・17)「WIDE NEWS 惨！一人の狂気が生んだ熊野の、八つ墓村、一家七人殺し」(川嶋正人)
- ④ 『週刊サンケイ』(昭55・2・21)「三重一族7人殺し『血の親族会議』を決意するまでの『猟銃乱射男』の不運」
- 中上が『熊野集』「桜川」で言及している、子供にジュースを買いに行かせる話は、『週刊朝日』(②)にこうある。

以下は、惨劇から生き残った充さんの証言である。「家に戻ると一通が、弟のとし坊(寿一)に『忠^(五)』と正和^(四)』を連れてジュースを買いに行け』と半ば強制的にいつていた。かわいがっていた弟と愛児二人だけは助けてやろうと思ひ、逃がしたのだろう。」(中略)

最初は、充さんのいうとおり、愛児を逃がそうとしたのかもしれない。だが次々と一族を殺していった一通は、子供だけが生き残つても、と最後は、一族心中[〃]を図つたともみられる。(②)

事件の動機については、長男の腎臓病入院について悩んでいたことに加え、同じく『週刊朝日』(②)は以下のように伝えている。

また石工として働く自分自身も、石を切るさいの機械の振動で白ろう病にかかり、悩んでいた。

そのうえ、白ろう病で労災認定を受け休業特別支給金を受け取つて

いるため、休業してなければならぬのに、一通は働いて賃金をもらっていた。この不正受給に労基署が動き出し、やがて警察の手がまわると思い込んで、苦しんでいたという。田畑や山林を持ち、地区でも三本の指に入る池田家の当主として、警察に捕まるとなると、一族の恥につながる。(②)

また『週刊サンケイ』(④)は、池田一通の過去の逸話を、次のような証言を通して伝えている。

「新宮駅前で、ウチ(三重交通)のバスと一通の乗用車が行きおつて、スレ違えなくなつた。車掌が一通に何か声をかけると、逆上した一通がバスに乗り込んできて、俺は動かんぞ」とすごい剣幕で怒鳴つてきた。車掌が泣いて詫言を入れても、一通は全然聞き入れず、一通の知人を呼んできての説得にやっと応じたんです」(三重交通関係者(④))

この一家七人殺し事件を「自分がいままで書いて来た小説の顕現化だとも思った」(『熊野集』)中上は、オリジナル・シナリオ『火まつり』執筆に当たつて、まさに舞台を当の熊野市二本島にとり、一家惨殺と自殺というラストシーンへ向けて書いていく。長男の病気とか不正受給といった具体的な動機は取り払い、「ムシャクシャする」空虚感に抽象化しながら、不意の暴発へと追ひ立てられていく主人公の闇を仮構する。池田一通が子供にジュースを買いに行かせる挿話は、シナリオのラストシーンに生かされている。また完成映画では消えたものの、狭い道でバスと対向した達男が、バスの運転手に食つてかかる場面がシナリオにはあり、これも池田一通自身の逸話を踏まえていたことが窺える。

III 小説『火まつり』

映画『火まつり』公開の直後から、中上はその小説化に取り組んでいく。小説『火まつり』は、『文学界』（昭60・7、昭60・10、昭60・11、昭61・1、昭62・2）に断続的に連載され、単行本『火まつり』（文藝春秋、昭62）として刊行された。初出と初刊本との異同は字句などわずかにすぎない。

小説は、ほぼオリジナル・シナリオの展開に添いながら進んでいくが、シナリオでの「基視子」は小説では「キミコ」と名づけられ、「多淫多情」ぶりはそのままながら、小説での重要度はシナリオより後退している。基視子が金をまきあげる土地ブローカー「山本の兄さん」も小説には登場しない。

また小説では達男が当主となる池田家の家の歴史が説明され、同時にその没落の翳りが書き込まれている。達男の家は「二木島の湾の左手に、まるで神世の代から二木島に住んでいる一統だと暗黙のうちに主張するよう」な家であり、「湾を見おろすように建った小さな城の観を呈していた」。達男は、父親が齢老いるまで何人産んでも女ばかりなので、父母が神仏に祈ってようやく授けられた、七人きょうだいの一等末の男子である。八十六で父親は死ぬが、怖い者なしに育った達男は、海でも山でも「してはいけないことを平気でした」。

達男の父親は紀勢線の全通に当たって、「二木島が発展するためなら」と持っていた山二つを国鉄に提供したが、後に母親の眼からは、町をあげて喜んだ紀勢線全通が、池田家の「王国の崩壊」の節目のように見える。生活の電化が進み、教育が向上し、町に「平等という考え方が浸透していくと、それまで何もかも池田の家の世話になっていた町の人々は、それを忘れていく。そして跡取りの達男を「目の敵にし、ある

事ない事言って廻り、達男を引きずりおろそうとする」。オリジナル・シナリオではこういった池田の家の歴史はほとんど窺えず、紀勢線全通時の祝祭的な光景が懐旧として挿入されるばかりだ。小説にあつては、「王国の崩壊」後に当主となった達男にとつての、「家」の重圧との葛藤が感じ取れ、没落の不穏な気配が作品に漂っている。

既述のように、シナリオでは、「噂の辻」と名づけて、町の広場にたむろする老婆や漁婦たちの噂話を通して物語を手繰りだそうとした中上だが、小説では全体を通してそれを方法化している。小説では、二木島の町の人々の推測や憶断に主たる視点を置きながら、「札つきのワル」である達男の行動が語られる傾向が強くなる。主人公である達男の言動は、周りの者の視線を通して描き出されることのほうが多く、達男本人の意識に分け入って、その心内語が語られることはほとんどない。したがって先に、「家」の重圧との達男の葛藤について述べたが、それもあくまで周囲から見ての推断が優っている。「札つきのワル」は粗暴な「王」として君臨し、海でも山でも「してはいけないこと」を平気でするが、それを語るのを取り巻きの者たちであり、「王」自身は語らず、取り巻きばかりが嘆き、物語る。

ある意味で達男に最も近い取り巻きであり、「札つきのワル」を「アニ」と慕い、一方で対抗心を奮い立たせる「札つきのひ若いワル」が良太である。良太の心理に降り立っての叙述は至る所に見受けられる。英雄憧憬はやがて反発と憎悪に変わる。シナリオには欠けていた良太による「王殺し」の葛藤が、小説には苛烈に書き込まれている。

良太は訊かなかつた。たとえ訊いたとしても、答は良太の得心するものではない。山仕事の人夫らの信じる迷信をその通り言う達男でな

く、良太が達男に従って山仕事に入ってから、昼も夜も可能な限り注視しつづけて来た大きな体をした荒くれの生身の本当を知りたい。海中深く潜り突く伊勢海老のようにヤスで達男を仕止めてみたかったし、猿を狩ったように達男を仕止めてみたかった。夜の闇に乗じて良太は何度も達男がキミコを呼び出して鬪るのを目撃したが、闇に浮き出た白い裸体が達男とキミコの生身ではなく狩って思いのまま操れる猿の雄雌か、子供の頃、夏休みあけに学校に提出したホルマリン注射を射ってピンで留めた標本の昆虫であつて欲しかった。達男の腰が動き、手が動く度にキミコは声をあげ、良太は固唾を飲みながら、二人が裸の人間ではなく、重油一缶であつけなく息をつまらせ水面に白い腹を見せて浮きあがつたイケスのハマチのような気がした。

（小説『火まつり』）

伊勢海老のように、猿のように、達男を仕止めてみたいと良太は思う。そして良太は養殖ハマチのイケスに重油をまき、二木島の青年会館のゴミ箱に放火し、漁協理事殴打を謀り、キミコを脅迫・追放する。いわばワナを仕掛け、これらの悪事すべてを「札つきのワル」の達男の仕業のように人々に思い込ませようとする。実際二木島の誰もが達男の仕業と噂し、非難するが、達男自身はそれをあえて積極的に否定しない。達男はすべて良太の仕業と知り抜いており、かといって責めるでもなく、自ら弁明するでもなく、超然と構えたまま、他人の「悪」も丸ごと引き受けて「暴君」の威勢に変えていく。

さらに山の木の切り出しで約一ヶ月半山小屋に寝泊りし、山の靈気を全身に受けた達男は、「前にも増して凶暴になり、人間でない者になつたような」気が、良太にはする。「風の動きを誰よりもよく感知し、音

を細かく聴き分ける。山に巣喰うどの鳥や獣よりも敏感に空気や水や草木に反応する」達男は、良太には「手なづけようもないし、捕獲しようもない獲物」に見える。神仏に祈つてようやく授かった男の子だという達男は、自然の靈力を得て凶暴化し、「他人にはうかがい知れないような事を、山の神と約束した」のであり、ワルの良太など問題ではなく、「人間でない者」と化している。

二回目にイケスにまかれた重油は、すべてを知っていた達男に脅されて良太がまく。良太は達男が「一等大きなワナに獲物がかかった」と小賢しく喜ぶが、達男はそのワナをも超然とすり抜け、さらに大いなる闇へと踏み出していく。

ついには無化する卑小な奸計とはいえ、ここには良太の「王殺し」の葛藤があり、「王国の崩壊」を控えた「家」の重圧との達男の葛藤もまた窺える。シナリオに欠けていたこれらの葛藤を書き込みながら、小説『火まつり』は、一家惨殺のラストへとなだれ込んでいく。「悪いのは俺じゃ、ええのも俺じゃ。二木島はなにもかも俺のものじゃ」と達男は嘯くが、その心の内奥は最後まで叙述されない。親族会議が招集された達男の家から、猟銃の銃声が何発も轟く叙事的な描写とともに、作品はたちまち幕を引く。

小説では、映画と違って描写は達男の家のうちにさえ入り込んでいない。しかし読者は、その描写の不在の彼方に、自然の靈力を得て凶暴化し、「他人にはうかがい知れないような事を、山の神と約束した」「人間でない者」を幻視するはずだ。叙述されない闇の中に「悪」そのものが立ち上がる^⑤。死せる「王」は語らず、暴悪はたちどころに噂を通して神話化されるだろう。

ところで中上健次自身の実際の家族に照らしてみたとき、「家」の崩

壊に立ち会い自殺する「アニ」ということでいえば、そこに健次の異父兄・木下行平の面影が投影されているのかもしれない。健次八歳のとき、母ちさとは中上七郎と一緒になるために健次を連れて新宮市野田に移り住む。異父兄の木下行平は春日のものと家にひとり取り残され、鶏を飼いながら孤独に暮らす。厄介者として見捨てられたと感じた行平は、酒に酔っては斧を手にして、母と健次の家に何度もどなり込んできたという。アルコール中毒で精神が不安定になった行平は、昭和三十四年三月三日、二十四歳で縊死。高山文彦『エレクトラ 中上健次の生涯』（文藝春秋、平19）によれば、「母を同じくする兄弟が母の都合によって離ればなれになったあと、一介の日雇いから土建請負業者として独立するまでの中上七郎の雌伏の時代の生活の幾ばくかを、行平はときに金の無心によって来るちさとを通じて支えた」とのこと、後年の健次はこの異父兄の孤独と辛苦を思うたびに愛しさで泣き出したという。

初期の中上作品からこの異父兄は仮構のうちたびたび登場するが、四方田犬彦『貴種と転生・中上健次』（ちくま学芸文庫、平13）もまた「十数年前に縊死をとげた兄は単なる人間であることを止め、もはや特定の時間に属さない死せる英雄の祖型に近いものへと、少しずつ姿を変えようとしている」と述べている。「家」の解体の翳りを閲しながら、自らを「生贄」として差し出した英雄が、小説『火まつり』の達男だとすれば、そこに健次の自殺した異父兄への「鎮魂」の身振りを読むことも許されるかもしれない。

〔付記〕 本稿での中上健次『紀州木の国・根の国物語』『熊野集』『火の文学』『火まつり』からの引用は、いずれも単行本の初刊本を典拠とした。

〔註〕

- (1) 上野元『神倉神社とお燈祭（速玉文庫第三卷）』（熊野速玉大社、昭41年版、平16五版）
- (2) 柳町光男・長部日出雄対談「火まつり」（『ギネマ旬報』昭60・5月下旬号）に柳町光男の以下の発言がある。
「柳町 今度は熊野を舞台にして、きこりをやって、毎日、山の中に入つて、山の自然に囲まれてる。そういうとき、山にひそむ精霊というか悪霊を見てしまった男にしよう。見てしまうことから、セックスするこゝとへまで行く。そのことから悲劇が起きるといふ話をまず僕が作ったわけです。それを中上に話しているうちに、向うが逆に、それは面白いから俺に書かせないかみたいなことになって。その原案を彼に渡して、そこからドラマを書き起こして、それで山の民、海の民とかいうことは、彼の中から出てきたことですよ。」
- (3) 中上健次『火の文学』（角川書店、昭60）所収「イドキュメント 火の文学」
- (4) 中上健次「物語の系譜・八人の作家（上田秋成（上）（下））」（『国文学』昭54・4〜5）で、中上は『雨月物語』『蛇性の姪』について、「パノラマ的転回、怪異、母権という最もよく秋成の特徴が出ている」作品だとして、「秋成は母権的な性の力関係を持っている作家である」と述べている。
- (5) 高澤秀次『中上健次事典 論考と取材日録』（恒文社21、平14）所収「中上健次新年譜」
- (6) 三重県立図書館所蔵の『朝日新聞』津市配達版。
- (7) 柄谷行人『坂口安吾と中上健次』（講談社文芸文庫、平18）
- (8) 初出は『群像』（昭55・7）。
- (9) 中上健次は上野千鶴子との対談「暴力と性、死とユートピア」（山口昌男編『火まつり』所収、リブレポート、昭60）で、生命を与えた者はそれを奪

うことができるとして、「与え、奪う人間というのは、そういうのは全部悪として存在する。そういう物語の構造があるんですね」と語っている。

(10) 林淑美『「火まつり」映画とシナリオと小説と』(『国文学 解釈と鑑賞』別冊〈中上健次〉所収、平5・9)にも、『火まつり』について、兄に対する「み霊なだめ」の視点からの論及がある。

(平成二十二年九月二十七日受理)